

澁澤龍彦の「蔵書目録」について(1)

跡上 史郎

一 はじめに

澁澤龍彦(一九二八―一九八七)は、一九五〇年代半ばより翻訳・評論・エッセイ・小説等で活躍した。亡くなつてから継続的に各種企画展が行われてきたが、没後三〇年(二〇一七年)にも世田谷文学館「澁澤龍彦ドラコニアの地平」展(一〇・七―二・一七)が開催され、連動企画も含め数多くの関連書籍の出版につながり、澁澤が現在も新たな読者を獲得し続けていることを印象付けた。

澁澤の文学は、極めてリブレスクであるという特徴を有する。澁澤は、アン・ドレ・ブルトン『黒いユーモア選集』(サジテール社、一九五〇)の強い影響のもとに作家として出発しており⁽¹⁾、その根本にあるのはシュルレアリスムである。澁澤のテキストは、先行するさまざまなテキストのシュルレアリスム的なコラージュによって成り立っている。なぜコラージュがここまでの長期に亘る文学的生命を獲得し得たのか。この問題の解明は困難だが、事実として、どの書物のどの版のどの部分が何に使われたのかということは究明可能である。

また、そのタイトルが示す通り、『黒いユーモア選集』はアンソロジーであるが、澁澤もまた澁澤版『黒いユーモア選集』とも言うべき『暗黒のメルヘン』(立風書房、一九七・五)をはじめとして、数多くのアンソロジーを編んでおり、一九七七年に筑摩書房で企画された澁澤版世界文学全集は没後刊行された(『澁澤龍彦文学館』全二二巻、一九九〇・五―九三・三、一九七七年時の企画は刊行前に筑摩書房が倒産)。澁澤の文学的営為そのものが自らの基準で選んだテキストによって構成されたアンソロジーの拡張とも言える。

これは、澁澤が引用の作家でもあるという事態につながる。アラベスクのように織りなされる引用によるそのテキストは、剽窃の誹りを受けることもあったものの、結果的には、澁澤の著作の種本に使われたことが当該書の評価を高

め、後の翻訳出版時等の宣伝材料となっている。澁澤没後も澁澤にまつわる新刊書帯の惹句には、澁澤龍彦の名前が記載され続けているのだ。「フロイト、ブルトン、澁澤龍彦が刮目した夢研究史上の古典的著作がついに邦訳なる」(エルヴェ・ド・サン・ドニ『夢の操縦法』国書刊行会、二〇一二・三)、「澁澤龍彦が『ポリフィルス狂恋夢』と名づけて偏愛し、碩学プラーツが『15世紀のジョイス』と評する、謎に満ちた夢のタペストリー」(フランチェスコ・コロンナ『ヒュペネロートマキア・ポリフィリ』全訳・ポリフィルス狂恋夢』大橋喜之訳、八坂書房、二〇一八・一二)、「翻訳文学を求める熱心な編集者に告げておく。ピエール・マッコランは、現代に復活させてしかるべき作家である。マッコランを出す勇氣と機略のある編集者がいたら、私はそのひとに敬意を表するだろう。――澁澤龍彦」(ピエール・マッコラン『黄色い笑い／悪意』中村佳子／永田千奈訳、国書刊行会、二〇二二・一〇)、等々、その事例は枚挙に遑がない。澁澤が引用の組み合わせによって生成したテキストは、一九六〇年代以降の幻想文学や異端文学、演劇、舞踏、サブカルチャーにおいて重要な役割を担い、澁澤という窓を通じて古今東西の文学を読むという圏域をも形作ったのである。

一方、このような一般からの注目比して相対的に、澁澤のテキストはなかなか学術的分析の対象とはなつてこなかった。実際に起こっている現象をより適切に捉えるための枠組みがあり得るのではないだろうか。

二 澁澤龍彦の「蔵書目録」

引用の作家、澁澤龍彦を研究するに当たっては、まずはその主な引用元である澁澤の蔵書の調査から取り組むべきであろう。澁澤龍彦の蔵書は没後から現在までずっと鎌倉の澁澤邸にほぼ完璧な形で保存されているものの、遺族による個人蔵であり、文学館や資料館への寄託、寄贈は行われておらず、閲覧は困難である。

一方、澁澤龍彦を研究するための環境を飛躍的に向上させたのは、国書刊行会編集部『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』(国書刊行会、二〇〇六・一〇、以下『蔵書目録』と略記)の刊行であった。夏目漱石文庫(東北大学附属図書館蔵)や芥川龍之介文庫(日本近代文学館蔵)等と異なり、一商業出版社であ

る国書刊行会が個人蔵の蔵書目録を作成・販売し、二〇〇六年の刊行から二〇二一年の現在に至るまで新刊で購入可能であるという事態は特筆すべきものと言えよう。二〇二〇年代には、二〇二七年に澁澤没後四〇年、さらに二〇二八年に生誕百年を迎えようとしている中、これまでの商業出版を主とする蓄積に対して、学術研究サイドからの真摯な応答が期待される。

稿者が数えたところでは、『蔵書目録』に掲載された書物の総件数は、一〇、九五八件である（基本的に一件一冊であるが、全集の一揃いや上下巻の一揃い等を一件として数えるので、実際の冊数はいくぶん増える）。そのうち洋書は、二、三〇七件で、およそ全体の21%である。多くはフランス語の書物であるが、英語（七七件）やドイツ語（二四件）、その他イタリア語等のものも若干混じっている^②。また、澁澤が書き込みをしているのは、一、二六五件で、全体の約12%であり、そのうち四二五件が洋書である。澁澤龍彦はもともフランス文学の翻訳家として出発しているにも拘らず、洋書の占める割合はさほど高くないが、これは、日本への関心を深めていった後期になるほど、もともとあまり良いとは言えなかった澁澤の経済状態が好転していったことにもよるであろう。

澁澤龍彦の場合、自著に関する資料をほぼ完璧に保存していたので、全集作成の作業も速やかだったと言われているが、蔵書の保存状態も良い。澁澤のパートナーである澁澤龍子「インタビュー／澁澤龍彦と本」（『蔵書目録』）によると、澁澤は図書館を使うことは「まったく」なく、「ほんとにこの家にある本だけで、彼は全てを書いていたんですよ」という。おそらく『蔵書目録』によって、澁澤の著作のほぼすべての材源を考察することは可能ではあろう。ただ、いくつかの例外も想定しておく必要がある。

まず、澁澤は自らの手元にやってきた本をすべて保存していたわけではない。「出版社から送られてきたりした本なんかは、（中略）ずいぶん処理はしました」（澁澤龍子）というのがある程度有名な作家であれば当然のことであろうし、澁澤晩年の澁澤付編集者で、初の本格的評伝『龍彦親王航海記 澁澤龍彦伝』（白水社、二〇一九・一一）の著者でもある磯崎純一も、「澁澤さんは送られてきた若手の詩集なんて、その多くはだいたい処分されていた」^③（東雅夫×磯崎純一「幻の夢をうつ、に見る人——幻想の唯美とその晩年」『ユリイカ 10月臨時増刊号 総特集*須永朝彦——1946-2021』二〇二一年・九）という。こ

一四

れらは澁澤の著作との関連についてはあまり考慮する必要はないであろう。

一方、巖谷國士は、松山俊太郎との対談「澁澤龍彦の書物」（『蔵書目録』）において、「僕の記憶では、あがってすぐ左側に（ハヤカワ・ミステリ）が積んであったんだ。雑誌でミステリ月評をやっていた時期もあったから。それが今度の蔵書目録にはあんまりないみたいです。だから、小町から北鎌倉の山ノ内に引っこすときに、かなり処分してるんじゃないかな。雑誌も全部の号をとっておくなんてタイプじゃないし。それから人にあげちゃうってこともあったと思う。減ってるものもかなりある」と証言している。これは、澁澤の著作の材源として使われていたものであったとしても、手放してしまったものがあるという可能性を考慮しなければならないことを示唆するものである。

また、巖谷の言を受けての松山「あなたは乾元社の『南方熊楠全集』なんかをもらったんでしょう」に、巖谷は「うん、もらいましたね」と返すが、これは澁澤が重複本については積極的に友人に譲っていたことを示す事例である。しかし、重複していないにも拘らず友人に本を譲っているケースもある。小笠原豊樹は、何度も澁澤から同じ本を借りていたところ「これは君が持っていたほうがいいんじゃない？」と譲渡されたという（小笠原豊樹「非正統派、戦後初期翻訳界を行く」『澁澤龍彦翻訳全集月報①』河出書房新社、一九九六・一〇）。澁澤幸子（龍彦の実妹）は『澁澤龍彦の少年世界』（集英社、一九九七・四）で、兄からよく本を借りていたことを証言しているが、兄の没後、形見分けとして数冊を譲り受けたことを書名とともに記している。

また、澁澤の著作中には、「私は、戦後間もなく、高志書房（中略）『黒死館殺人事件』によって、初めてこの作品に接した時の鮮烈な驚きを、今でもありありと思い出す。残念ながら現在、この本は私の手もとにない」^④（「小栗虫太郎・木々高太郎集」解説『昭和国民文学全集』第十四巻、筑摩書房、一九七四・七）という事例、「昭和十一年に第一書房から出たフランス現代小説全十巻」のうち「二冊のみ」（『ヴァルナーの鎖』『ジュリアン・グリーン全集第四巻月報』人文書院、一九八〇・二）が手もとに残ったという事例等、思い出深い書物であってもなんらかの理由で手放してしまったものがあることが述べられているケースがある。これは、澁澤龍子の「ごく若いころの本は、読んでは売っちゃって、また新しい本を買っていかんじだったでしょうから、その頃の本は今では残っていないのもずいぶん多いと思います。終戦直後は、

本がないし、お金もなくて買えないから」という説明の通りであろう。また、植谷雄高は澁澤にとって重要な作家であり、『蔵書目録』中にも多くの著作が認められるが、「私の手もとには現代思潮社版の短編集『虚空』が紛失してしまつて、見当たらない」⁽⁵⁾（金魚鉢のなかの金魚）『植谷雄高作品集』12、河出書房新社、一九七九・一二）という原因不明の事例もある。

一方、「絶対本は貸したり借りたりするもんじゃないっていう考えでした。でも、もちろん少しは貸し借りしたことあつたとは思いますが。基本的には本は、自分で買う」と澁澤龍彦の証言する基本的態度は、ほぼその通りだったのであろうが、それに逸脱する事例もないではない。高山宏は、澁澤邸を訪れた際のことを、『アベラシオン』や『イシス探求』など、大事にしておられたはずの本を、コピーしていいよといつていっぱいもたして帰してくれた。本については吝嗇な年長者しか知らなかったばかりも（中略）大感激して帰つたのである。『アナモルフォーズ』についていえば、パリのオリヴィエ・ペラン社刊の一九五五年初版だった」（『解説』ユルギス・バルトルシャイティス『アナモルフォーズ』バルトルシャイティス著作集2、高山宏訳、国書刊行会、一九九二・一二）と言っているが、最後の書物については『蔵書目録』には認められない。澁澤がさまざまな知人・友人に貸し与えた本が、なんらかの手違いで戻ってきていないというケースもないとは言えず、それが澁澤の著作の材源となつた重要な書物であるという可能性も想定しなければならないであろうが、一方でそれは大量にあるとも考えにくく、例外的な事態であろう。

また、逆に、澁澤が知人・友人から借りた本で原稿を書いていたケースもある。そのサン・ジュスト論「恐怖の大天使」において「小牧近江氏の御好意で、数年間借覧することを許されたシャルル・ヴェレエ編『サン・ジュスト全集』二巻は、学生時代、わたしの枕頭の書であり」（『異端の肖像』桃源社、一九六七・五）と言っているのは、経済的に苦しかった頃に良い先輩に恵まれた幸運なケースである。一方、さらに後の澁澤は、「エビキュリアン・リブレスク」において、「フランス・マニエリスム期に流行したエロティックな詩の形式Blason（本来は紋章の意）」について調べはじめた私が、そのことを氏にお伝えすると、氏はさつそく、最新の手頃な参考書としてアルベール・マリー・シユミットやミハイル・バフチンのそれを挙げられ、私は喜んでそれらの書物を拝借するために、鶴沼のお宅へ伺つたのである」（『偏愛的作家論』青

土社、一九七二・六における「昭和四十七年三月」付の「付記」と林達夫との交流について述べている。これは、「紋章について」（『草月』一九七二・六）、「紋章について」（『ユリイカ』一九七三・八）等につながっている。

また、オーブリ・ビズレー『美神の館』（桃源社、一九六八・九）は、澁澤がフランス語ではなく英語の書物を翻訳した極めて珍しいケースだが、同書所収の「オーブリ・ビズレー『美神の館』解題」によれば、「今から十三年ばかり前、ふとした偶然から、私は松山俊太郎という人物と相識するようになったが、この翻訳のテキストとして私が用いたR・A・ウォーカー編の『ビズレー雑録』は、この松山君から拝借したのである」とある。「ただ、この『ビズレー雑録』に収められた『ウェヌスとタンホイザー』には削除された部分があつて、私はこれを全訳するために、さらに二冊の別のテキストを利用しなければならなかった。その一つは、これもやはり松山君から拝借したもので、学者、愛好家、図書館のための予約配布による私家版のドイツ語訳本である。（中略）もう一つは、一九六三年にパリのテラン・ヴァーグ社から刊行された、オデイル・コロンナ訳によるフランス語訳本である」。つまり、最後のフランス語訳のみが澁澤の所蔵本であり、この言の通り『蔵書目録』には以下が認められる。

04-06-22 L'histoire de Vénus et Tannhäuser, Beardsley(Aubrey), trad. de Odile Colonna, Terrain vague, 1963⁽⁶⁾

英語版『ウェヌスとタンホイザー』の別の版

32-06-37 The story of Venus and Tannhäuser, Beardsley, Academy editions, 1971
は、翻訳後の刊行であり、澁澤は松山から借りた本を主として翻訳の仕事を進めたことになる。

また、先の澁澤龍彦の図書館に関する発言の中には、「編集者の方に、図書館から特殊な本を借りてきてもらったことはあります」という証言もある。『蔵書目録』中には、

18-06-17 本朝男色考、岩田準一（コピー本）
24-07-05 室町時代物語集①ー⑤、井上書房、1962（コピー本）
36-01-02 カルパチアの城、ヴェルス、安東次男訳、ヴェルヌ全集⑥、集英社、1968（コピー本）

と、三件の「コピー本」が認められるが、手を尽くしても入手できなかったも

のを図書館等で借りてコピーした可能性があり、中にはコピーせず、使用後そのまま返却したものもあったかもしれない。

以上の例から、すべてが『蔵書目録』で完結するわけではないのは明白であるが、やはりこれらは例外と言わなければならない。基本的に「ほんとにこの家にある本だけで、彼は全てを書いていたんですよ」という原則に従って考察を進めることが可能であろう。

なお、『蔵書目録』そのものにも訂正や補完の必要があるかもしれない。

『蔵書目録』では、濫澤の書き込みが認められる場合★印によってそれを示すが、『蔵書目録』作成に当たった磯崎純一自身が「ざっと見ただけ」(東雅夫・磯崎純一「対談／書物の宇宙誌・解題」『蔵書目録』)と言っている通りで完璧なものではなく、例えば、

06-01-44 *Le miroir qui fuit*, Papini (Giovanni), présenté de J. L. Borges, Retz-Franco Maia Ricci, 1979

に関しては『蔵書目録』口絵に書き込みがわかる写真が掲載されているものの、実際のリスト上では★が脱落している。書き込みがないのに★が付されるという逆方向のミスは考えにくいだが、実際には濫澤は『蔵書目録』で示されている以上の書物に書き込みをしていると見るべきであろう。また、『蔵書目録』では、書き込みがあるページの写真が示された同書のような例外を除いて、書き込みの有無のみがわかり、書き込みの内容はわからない。

また、リストにおける出版年は西暦に統一されているが、年号の変換ミスの可能性がある。例えば、

21-03-22 飢餓同盟、安部公房、大日本雄弁会講談社、1949

は、初版を確認すると奥付では「昭和29年2月15日 第1刷発行」である。もし濫澤の所蔵本も初版であるならば、「1949」は正しくは「1954」であり、和暦から西暦への変換ミスと思われる。また、初版ではなく後の版であったとしても、「1949」になることはあり得ないので、訂正が必要であろう。

また、各種アンソロジー、世界文学大系、日本随筆大成等のシリーズものの場合、シリーズ名や作家名のみがわかり収録作が記載されないケースが多いが、収録内容がわかれば、検索性が格段に向上するであろう。例えば、濫澤『東西不思議物語』(毎日新聞社、一九七七・六)で二度ほど言及される滝沢馬琴編『兎園小説』は、

●41-01-42 日本随筆大成・第2期【全24巻】、吉川弘文館、1973⁽²⁾の第一巻に収録されているが、『蔵書目録』からはわからない。また、濫澤の場合、全集を全巻揃えるということにはまったくこだわりがなく、個人作家全集の端本の収録作がわかると、やはり検索性が向上するであろう。アンソロジーについても同断で、各アンソロジーの収録作がリスト化されていれば、濫澤が例えばある作家の著作を所持していなくても、アンソロジーに収録された当該作家作品を材源としていたといったことがわかるようになる⁽⁸⁾。

三 ジョヴァンニ・パピーニの事例

本節から個別の例を詳しく検討していく。

濫澤龍彦「鏡と影について」(『ユリイカ』一九八〇・七)⁽⁹⁾は、濫澤の引用／剽窃問題を象徴するテキストと言えるであろう。それは、特段このテキストにおける引用の比率が高いとか、ここまでやってしまうと剽窃と判定せざるを得ないという程度が甚だしいとかいうことではまったくなく。それは、山下武「ドッペルゲンガー文学考第十二回●濫澤龍彦^(マ)」(『幻想文学』第四八号、一九九六・一〇)が「鏡と影について」を取り上げ、濫澤を苛烈に非難した波紋が広がり、『濫澤龍彦翻訳全集』(河出書房新社、一九九五・一〇)一九九八(三)の解題にまで影響を与えてしまうほどであったことによる。山下によれば、「ジョバンニ・パピーニ(一八八一―一九五六)の小説にこれと寸分ちがわぬ話があり、「ただ濫澤は冒頭に中国の神仙譚を借りただけ」で、「これほど情況証拠が揃った剽窃も珍しい」という。山下が挙げるパピーニのテキストは、「泉水のなかの二つの顔」河島英昭訳『逃げてゆく鏡』・92・国書刊行会」であるが、これは濫澤没後の刊行であり、山下は「濫澤龍彦^(マ)は仏訳か英訳でパピーニの原作を読んだのだろうが、パピーニが日本ではほとんど読まれていないところから、剽窃してもネタが割れないと多寡を括ったのではあるまいか」とする。山下は、「仏訳か英訳」の具体的な書物を特定しておらず、「中国の神仙譚」が何であるかも明らかにしていない。剽窃と言うには調査が不足しているかもしれない。

一方、東雅夫は、自ら編んだアンソロジー『文豪ノ怪談ジュニアセレクション 影 北原白秋・濫澤龍彦ほか』(汐文社、二〇一八・七)に「鏡と影につい

て」を収録し、その「註釈」において、「鏡と影について」は、パピーニを「鮮やかに本歌取りして成ったもの」とする。山下と同じ材料（澁澤没後の翻訳）に基づきつつも評価の方向性は一八〇度異なっている。この領域においては、剽窃、コラージュ、引用、諷刺、パロディ、アナトミー、アダプテーション、サンプリング、オマージュ(?) etc.、さまざまな隣接領域との関連にまつわる理論的考察が不可欠であり、また論者の選択する立場によっても結論や主張は容易に入れ替わってしまい、剽窃か否かを決定すること自体を目的とした議論は、あまり有意義なものとなることが期待できない。『蔵書目録』を主眼とする本稿においては、剽窃問題には立ち入らないこととするが、山下の場合、正面切って澁澤龍彦の行いを剽窃と断ずることによって、澁澤のテクストの持つ一側面をくつきりさせ、認知の容易性を高め、澁澤のテクストに対峙するに当たっての基本的な姿勢をわかりやすくしたという功績は認められるであろう。

山下の後、磯崎（前掲「対談／書物の宇宙誌・解題」）が、澁澤蔵書中のフランス語訳『逃げていく鏡』、つまり先に掲げた

06-01-44 *Le miroir qui fuit*, *Papini (Giovanni)*, présenté de J. L. Borges, Reiz-Franco Maria Ricci, 1979

の写真を示し、「(下)に収録された「泉水のなかの二つの顔」を「鏡と影について」の下敷きに使っていますが、やっぱり興味深い書き込みがある」と指摘した。「泉水のなかの二つの顔」は、同書中の「Deux images dans une conque」である。これが「鏡と影について」の材源としての物的証拠と言える。

Le miroir qui fuit は、イタリアで企画されたホルヘ・ルイス・ボルヘス編纂による『バベルの図書館』シリーズ中の一冊で、ジョヴァンニ・パピーニの短編集（一〇編を収録）であり、山下が挙げていたのは同シリーズの日本語訳である。

パピーニは日本での知名度は決して高くはないが、パピーニに関心を寄せた先例として芥川龍之介があり、『芥川龍之介文庫目録』（日本近代文学館、一九七七・七）には、三冊のパピーニの著作（英訳）が認められる。芥川の関心はキリスト教的文脈によるものが多い⁹⁰。澁澤もまたパピーニがキリスト者として書いたダンテに関する評論、およびパピーニによる解説が付された『神曲』に書き込みをしている。

★32-01-44 生けるダンテ、パピーニ（デヨバンニ）、宮崎信彦訳、日本書院、1945

★40-01-166 世界文学大系⑥、ダンテ、野上素一訳、筑摩書房、1962（パピーニの解説「ダンテの魂」は『生けるダンテ』の抄訳）

これらは明らかにパピーニよりもダンテへの関心によるものである。澁澤の著作中にダンテは繰り返し現れる。

一方、「Deux images dans une conque」も「鏡と影について」もキリスト教の要素は希薄であり、どちらも過去の自分に出会うという内容の分身小説である。ダンテの解説者やキリスト者ではない、分身小説の書き手としてのパピーニに澁澤が出会うには、やはり *Le miroir qui fuit* 編者としてのボルヘスとの関連を視野に入れなければならない。ボルヘスは、*Le miroir qui fuit* の序文解説において、パピーニ再読により「そこには、自分が発明したと思っていた寓話や、他の時空の状況に移して自分なりに書き直したに過ぎなかった寓話があることを発見し、驚き、感謝するのだ」⁹¹と、つまり無意識のうちにパピーニの影響を受けた作品を書いていたと言っている。これは、例えば澁澤所蔵本では『砂の本』

05-02-68 *Le livre de sable*, *Borges (Jorge Luis)*, trad. de Françoise Rosset, Gallimard, 1978

等に収録された「L'autre」（他者）であろう。「Deux images dans une conque」と同じく過去の自分に出会う話である。澁澤のパピーニへの興味がボルヘス経由であることは、以下のような言からも明白であろう。

ジョヴァンニ・パピーニやボルヘスの短篇、こういった作品が私には永遠の新鮮さをもった、語の本来の意味におけるSF作品、すなわち思考実験をその本質とするSF作品のように思われてならないのである。（「SFをめぐる覚書」『国文学』一九八二・八）

ジョヴァンニ・パピーニの短篇のおもしろさを知ったのも、（中略）ボルヘスに教えられてのことではなかったろうか。（「ボルヘス追悼」『新潮』一九八六・八）

さらにその前史としてロジェ・カイヨワにも注意しておきたい。

★08-02-16 *Anthologie du fantastique* ①②, *Caillois (Roger)*, Gallimard, 1966
このカイヨワ編の幻想文学アンソロジーの②に、パピーニの分身小説

‘Histoire complètement absurde’（完全に馬鹿げた話）が収録されている。そして同書にはボルヘスの *‘Le Sud’*（南部）と *‘Le miroir d'encre’*（インクの鏡）、仮面と分身の物語）も収録されているのだ。澁澤がボルヘスに関心を抱いたのは、カイヨワの恩恵によるところが大きいはずである。「ボルヘス追悼」において澁澤は「フランスにおける（中略）ボルヘスの熱心な紹介者は、あの頑固一徹な幻想好きの合理主義者ロジェ・カイヨワであった」とするが、『蔵書目録』中、以下の二冊がカイヨワ訳によるボルヘスなのだ。

★06-01-39 *Histoire de l'infamie/Histoire de l'éternité*, *Borges (Jorge Luis)*, trad. de Roger Cailliois et Laure Guille, Rocher, 1951

★06-01-40 *L'auteur et autres textes, EL hacedor, Borges (Jorge Luis)*, trad. de Roger Cailliois, Gallimard, 1965

そのカイヨワの編纂によるアンソロジーにおいて、パピーニとボルヘスが並んでいるのである。後にボルヘスによるパピーニのアンソロジーが出た時に、澁澤が飛びついたのは必然と言えるだろう。

（つづく）

【注】

- (1) 拙稿「澁澤龍彦の出發——『撲滅の賦』と黒いユーモア」（『日本近代文学』第一〇四集、二〇二一・五）参照
- (2) タイトルからだけでは本文の言語の判別が難しいものもあり、現物を確認すると各件数に変更される可能性がある。
- (3) これは、それにも拘らず澁澤が須永朝彦から贈られた本を保存し、須永を高く評価していたという文脈での発言である。
- (4) 本稿における澁澤龍彦のテキストの引用は『澁澤龍彦全集』（河出書房新社）に拠る。
- (5) これは『虚空』（一九六〇・一一、現代思潮社）と推定され、『蔵書目録』にもない。
- (6) 『蔵書目録』に記載されている書物の表記はそれに従う。書名の前に付された数字 x・x・x は目録における分類番号を示す。
- (7) ●は全巻揃いであることを示す。
- (8) 劉佳寧「幽霊船の東西——澁澤龍彦『マドンナの真珠』とビエール・マッコラ」『薔薇の王』（第一回澁澤龍彦研究会、オンライン、二〇二一・五・二九）でこのケースが扱われた。
- (9) 『ドラコニア綺譚集』（青土社、一九八二・二）に収録、『新編ビブリオテクア澁澤龍彦 ドラコニア綺譚集』（白水社、一九八七・六）に再録。なお、『澁澤龍彦全集』

- における「鏡と影について」の本文には一箇所誤植がある（第19巻31頁後ろから2行目、【誤】理論、【正】理想）。
- (10) 笠井秋生「西方の人——ルナンとパピーニ」（『解釈と鑑賞』二〇〇七・九）
- (11) 引用は *Le miroir qui fuit* に拠る。イタリア語版に基づく河島英昭訳を参照するが、細部が異なっており基本的に私訳。原文は以下。
j'y découvre, étonné et reconnaissant, des fables que j'avais cru inventer et que j'ai élaborées à ma façon en d'autres circonstances de l'espace et du temps